

Title	ロジュニヤイ 『日本語速習』の著者と出典について
Author(s)	Albeker, András
Citation	京都大学國文學論叢 (2011), 26: 23-38
Issue Date	2011-09-30
URL	http://hdl.handle.net/2433/150448
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ロジュニヤイ『日本語速習』の著者と出典について

Albeker András

1. はじめに

1904年に勃発した日露戦争により、反露感情の強いハンガリーにおいて日本への関心が高まった。例えば、日露戦争や日本に関する書籍が出版されたり、ハンガリーにおいて初めて柔道の授業が行われたりした(註1)。このような傾向の中で、『Rozsnyai gyors nyelvmesterei』(ロジュニヤイ外国語速習)シリーズの第15巻目としてハンガリー語で書かれた初めての日本語の学習書が出版された。この学習書が長期間にわたって、唯一の日本語の教科書であり、これに次ぐ教科書は1970年代を待たなければならない(註2)。

この『日本語速習』は、明治期末の話し言葉を扱い、音声・文法において、関西方言的な要素が見受けられる。また、ハンガリー人を対象とするため、発音法と文法において、ハンガリー語話者の観点から、日本語とハンガリー語を比較して説明するところがある。このような点で、独・仏・英語で著述された日本語学習書と異なる性格を持っている(註3)。

『日本語速習』の先行研究に近藤正憲の論文がある(註4)。近藤は、著者の名前と出典を特定していないが、その人物像について、日本に長期間滞在したハンガリー人であり、日本語習得上、関西方言の影響を受けた可能性が高いと考えている。

本稿では、『日本語速習』の著者は誰であるか、著者がどのような資料を参照して執筆したかといった成立上の問題解決を試みた。調査の初期の段階でハンガリー国立図書館オーエスカー(OSZK)に所蔵されている『日本語速習』の写真を利用したが、その書籍は傷みが激しく、判読できない部分があった(註5)。幸運にも、ブダペシュトの古書店から殆ど完璧な状態である一冊を入手できたので、それを使うこととした。なお、構成の調査のために、同シリーズの『スロヴァキア語速習』も購入した。

2. 『日本語速習』の紹介

表紙に出版社名とハンガリー語・ドイツ語で

『Rozsnyai gyors nyelvmesterei. Bármely nyelv alapos elsajátítására tanító nélkül. Japán. Gyakorlati japán-magyar-német beszélgetésekkel, hét eredeti japán-írástáblával, a kiejtés pontos feltüntetésével / Japanische Grammatik. Praktische Japanisch-Ungarisch-Deutsche Conversation. Mit sieben original-japanischen Schrift-Tabellen mit Bezeichnung der

Aussprache. Ohne Lehrer]

(教師無しでどの言語もよく習得するためのロジュニャイ外国語速習。日本語。発音が正しく示される実用的な日・洪・独会話。七つの日本文字図付き。)

と題名が書かれてある。著者と出版年は表示されていないが、出版年に関しては目録『日本関係ハンガリー語文献』と近藤の論文に1905年とあり、1906年とする資料もあるが、確定するのは難しい。見返しに目次、度量衡、日本の貨幣、月名、既刊の速習シリーズの一覧、値段、注文体が記載してある。裏表紙とその内側に同出版社の音楽教科書・教則本の紹介と印刷所の名前・住所がある。最初の頁に序論はないが、題名に *tanító nélkül* (教師無し) と記載してあり、本シリーズは独学用の教科書であることがうたわれている。本書は64ページで、その内容を以下のように四つの部分に分けることが出来る：

文法篇：1頁から34頁まで、会話篇：35頁から47頁まで、

辞書篇：48頁から56頁まで、文字篇：56頁から64頁まで。

文字篇の一部が漢字・仮名で書かれているのを除き、全篇がローマ字表記になっている。このローマ字表記には二種類の方式が使用されている。第一に、「通常使われる転写法」という綴りがあるが、これは日本のローマ字会の綴字法と類似している(註6)。もう一つの転写法は「発音通り」の転写である。主にハンガリー語で使われている文字を使用するが、そのほかにハンガリー語にはない綴りも使用する。

3. 出版者(註7)と速習シリーズについて

Rozsnyai Károly(ロジュニャイ・カーロイ；ハンガリーで姓名の順は日本と同じである)は、1889年にブダペシュトで古本屋を開店した。はじめ中古書を扱ったが、後に石版の大学参考書、教則本などを出版するようになった。独学用の『外国語速習』シリーズの1巻目の『ハンガリー語速習』は1900年に出版された。このシリーズは人気を得、Rozsnyai 出版社の名は全国的に知られるようになった。

国立図書館の蔵書検索と『スロヴァキア語速習』の見返しにある既刊書一覧によるとこのシリーズは少なくとも以下の22巻からなる。

ハンガリー語(ドイツ語話者用)、ドイツ語、フランス語、英語、イタリア語、ロシア語、スペイン語、ポルトガル語、ラテン語、ルーマニア語、スロヴァキア(トート)語、セルビア語、クロアチア語、チェコ語、日本語、ヘブライ語、ポーランド語、現代ギリシア語、トルコ語、エスペラント語、ブルガリア語、オランダ語

(出版順)

上記のように、主にオーストリア・ハンガリー二重帝国内もしくは隣国で話される言語を対象としている。構成は、一般的に文法概要とドイツ語訳付きの会話であるが、

日本語とトルコ語は辞書篇と文字図付きで、ブルガリア語と 에스ペラント語には辞書篇が加わっている。『オランダ語速習』の会話篇と辞書篇は別々に出版されたようである。

なお、増訂・増版された巻もあるが、『日本語速習』の改訂・増訂版の有無に関して現段階では情報がない。

言語速習シリーズの他に『ロジュニヤイ大文典』も作成された。この大文典シリーズには、ロシア語、ドイツ語、イタリア語、英語、セルビア語、ルーマニア語、フランス語があり、トルコ語、日本語等のアジアの言語は対象外である。

4. 著者について

著者の名前は、前述のように、明示されていないが、雑誌『Magyar Nyelv』(ハンガリー語)の2004年刊第4号の記事によれば、著者は Akantisz Viktor (アカンティス・ヴィクトル)である(註8)。そこで、人名事典『Magyar írók élete és munkái』(ハンガリー人作家とその作品)とその他の文献から得た情報を整理すると、現在、著者について以下の事がわかっている(註9)。人名事典の記載は、著者の自伝も参考して書かれたため、信頼性があると思われる。

著者の本名は、Akantisz Győző Béla Ernestsusz (アカンティス・ジョーゾー・ベーラ・エルネストゥス)である(註10)。人名事典に見える Viktor とは、Győző に対応するラテン語由来の名前である。1864年12月6日に Jászfényszaru (ヤースフェーニサル)で生まれた。Jászberény (ヤースベレーニ)の高等学校を卒業してから、ブダペシュト大学で哲学と法学を専攻した。その後、作家やイラストレーターとして生計を立てた。筆名は A.V. Fréron または A.V.であった。ロジュニヤイ出版社のために油絵、水彩画の教科書、チェスの教科書、『外国語速習』シリーズのドイツ語、フランス語、英語、イタリア語、ロシア語、スペイン語、ポルトガル語、日本語、ポーランド語、チェコ語、トルコ語の巻も執筆した。この人名事典によると、日本語、ポーランド語、チェコ語の学習書は、いずれも1906年に出版されている。その他、新聞『Magyar Lányok』(ハンガリー少女)や月刊『Természettudományi Közlöny』(自然科学新聞)などにも記事を載せたことある。1910年から執筆活動を止め、蔵書家 Todoroszku (トドレスク)氏の古書コレクションの修復・装丁の仕事にかかった(註11)。その傍ら、Todoroszku 氏と共に、ハンガリーの古書・写本の料紙の透かし模様を1000位集め、透かしのカタログを作成したが、出版されず、原稿のままである(註12)。1919年から1929年の退職まで、国立博物館の図書館で書籍専門家として勤務した。Akantisz は1943年10月21日に他界し、死亡届に職業は、ハンガリー国立博物館の書籍専門家・国立軍事博物館協会会員・画家・作家と記載されている(註13)。

Akantisz の来日の有無、日本語学習経験についての情報は無いが、来日した経験がなくとも、ブダペシュトで日本人と接する機会があったと考えられる(註14)。なお、『日本語速習』以外に Akantisz の著した日本関係の書籍には、1901年に出版された『Japáni mesék』

(日本昔話)と言う昔話集があり、31話が収録されている。挿絵は Akantisz が描いて、恐らくこれはハンガリーで初めての日本昔話集である(註15)。

5. 著者が参照した文献について

『日本語速習』に序論と参考文献一覧はない。それでは、著者は一体何を参考にして執筆したのか。Hoffmann、Chamberlain、Noack など他国の、時代が近い日本文典・学習書(註16)と比較すると、ドイツの August Seidel (アウグスト・ザイデル)の日本語の教科書の説明・例文と類似・一致が見られた。そのことから、Akantisz は Seidel の著作を参照しながら『日本語速習』を完成させたと考えられる。August Seidel に関して得られる情報は少ないが、現段階で次のことがわかっている(註17)。

August Seidel (1860?-?年)

言語学者。ドイツの Helmstedt で生まれ、Halle 大学で東洋語・古典語を学んだ。1889年から1903年まで植民地協会のベルリン事務所(Deutschen Kolonialgesellschaft)に勤務した。1890年代からアフリカ、アジア、ヨーロッパ諸語の教科書、アジア・アフリカの文学集を作成し、日本人向けにローマ字の口語体で書かれた、ドイツ語の教科書(Doits'-Bunten-Ky õ kwasho)を著した。『アフリカ・大洋州言語雑誌』を発行するほか、『ドイツ植民地新聞』の編集者でもある。来日の有無は不明である。

Seidel の著作のうち、Akantisz は以下の学習書を利用したと考えられる。

1. 『Praktische Grammatik der Japanischen Sprache』(実用的日本文典、以下『実』と略す) 1890年。ハンガリーでも出版された。口語と文語の両方の文法を解説している。ローマ字転写はドイツ式である。巻末に伊呂波、漢字 951字の一覧、読み物として聖書からの引用が掲載されている。参考文献のリストは無いが、脚注に Noack、Rein、Stephan Ladislaus の著述した書籍と『横浜奇談』の題名が見受けられる。

2. 『Grammatik der Japanischen Umgangssprache』(日本口語文典、以下『口』と略す) 1901年。ハンガリーでも出版され、上記の『Praktische Grammatik』の改訂版であるが、口語だけを扱う。転写は日本のローマ字会の綴字法に従う。参考文献のリストは記載されていないが、序文によると、例文は多くの日本の書籍から引用しているとある。脚注に Walter、Friedrich Müller、Hepburn、Gubbins、Gring の書籍が挙げられており、本書は日本文字を扱っていない。2010年にミシガン大学図書館が影印本を出版している。

3. 『Grammatik der Japanischen Schriftsprache』(日本文語文典、以下『文』と略す) 1904年。文語文法を対象とし、多くの点で『日本口語文典』に類似する。日本語の読み物はローマ字、平仮名、片仮名、漢字仮名交じりで記載されている。ローマ字はローマ字会の綴字法を使用している。脚注に Lange、Chamberlain、Karl Florenz、Gubbins、Gring、Rein の書籍・論文の題名が見受けられる。2010年にミシガン大学図書館が影印本を出版して

いる。

4. 『Systematisches Wörterbuch der Japanischen Umgangssprache』(日本口語体系的辞書、以下『辞』と略す) 1904 年。口語の単語集の辞書で、ローマ字表記になっている。分類辞書で、15 部門に分割されている。

Akantisz は、上記の書籍を利用し、文法の説明を翻訳・抄訳したと考えられる。以下では『日本語速習』の各篇について、Seidel の著作に拠ったと考えられる部分をまとめた。

5. 1. 文法篇

『日本語速習』の文法の説明を、Seidel の『実』、『口』、『文』と比較すると、主として『口』との類似・一致点が見られた。『日本語速習』の文法篇の各章は、Seidel のどの著作のどの部分に対応するかを、ページ数・セクション番号で示す。Seidel の『口』、『文』と『実』の構成は異なるため、前者の場合、セクション (§) の番号を、後者の場合、ページ数で表示する。

『日本語速習』

- 3 頁 二重子音 : 『口』 § 12、§ 14
- 3-4 頁 音節結合の発生 : 『口』 § 13
- 4 頁 発音の軟化 : 『口』 § 17-18、§ 21-23
- 4 頁 アクセント : 『口』 § 15
- 4-5 頁 名詞 : 『口』 § 44-45、§ 47、§ 52、§ 54、§ 60 『文』 § 131
- 6-7 頁 形容詞 : 『口』 § 78-79、§ 86、『実』 65-66 頁、85 頁
- 7-11 頁 代名詞 : 『口』 § 63-66、§ 69-70、§ 73、§ 75-77
- 12-15 頁 数詞 : 『口』 § 131-133、§ 135-143、§ 145-146、§ 148-149、
§ 152-153、『実』 52 頁、55 頁
- 16-19 頁 副詞 : 『口』 § 156-167、§ 169
- 19-20 頁 前置詞/後置詞、接尾辞 : 『口』 § 173、§ 281-287
- 20-21 頁 接続詞 : 『口』 § 175-176、§ 289-290 『実』 140-142 頁
- 21-31 頁 動詞 : 『口』 § 88-89、§ 91、§ 96-98、§ 100、§ 102-103、§ 115、
§ 128、§ 257、§ 269、§ 271-274、§ 276
- 31-34 頁 造語法 : 『口』 § 24-43

全ての類似点を示すと、本稿の範囲を越えるため、以下では一致の度合いが高いものを例として挙げる。

『口』3頁 § 15

Der Wortton wird im Japanischen wenig markiert. Der Japaner spricht vielmehr, wie der Franzose, so, dass er jede einzelne Silbe mit gleichmäßig starker Betonung versieht und nur durch den Satzton etwas Abwechslung in dieses Einerlei bringt.

日本語においては、語のアクセントはわずかである。むしろ、日本人はフランス人のように、個々の音節を同じ強さで発音し、この単調さにただ文のアクセントだけが変化をもたらす。

『口』59頁 § 132

Die japanische Reihe wird nicht von Personen gebraucht. Diese Zahlen sind eigentlich Hauptwörter und treten daher entweder in Genitiv vor oder häufiger als Apposition hinter das Hauptwort.

大和言葉の数詞は、人に対しては使われない。これらの数詞は本来の名詞であって、属格を伴う形で名詞の前につくか、或いはより多くの場合に同格として名詞の後につくかする。

『口』111頁 § 289-290

Die Bindewörter spielen im Japanischen eine weniger wichtige Rolle, da die Unterordnung eines Satzes unter einen andern in vielen Fällen ohne weiteres durch die Subordinationsform (mit oder ohne wa und mo) oder durch die Conditionalformen bewirkt werden kann. ... 中略 ... Die meisten Satzverbindenden Conjunctionen stehen am Ende des Nebensatzes;

『日本語速習』4頁

Japán nyelvben a hangsúly alig van s ép ugy, mint a francia, egyforma hangsúlylyal mondja ki a szótagokat s csupán a szóhangsúly(a mondatban) hoz egy kis változatosságot az egyhangu beszédbe.

日本語においては、アクセントはわずかであり、フランス人のように音節を同じ強さで発音するが、単調な言葉に、文における語のアクセントだけが変化をもたらす。

『日本語速習』12頁

A japáni számsor személyeknél nem alkalmazható, mint főnevek szerepelnek s ezért a szavak mellett, sajátító esetben azok előtt, vagy pedig mint utószók, a főnév után állanak.

大和言葉の数詞は、人に対しては使われない。これらは名詞であるので、語の前に付くとき属格を伴う。あるいは、後置詞として名詞の後に付く。

『日本語速習』21頁

A kötszók kevés szerepet játszanak a japán nyelvben, mert egy mondatnak a másik mondat alá való rendelése sok esetben minden további körülmény nélkül csupán az alárendelő formával (wa és mo) vagy a feltételes formával történik. A kötszó rendszeren a mellékmondat végén áll.

日本語では接続詞は大きな役割を果たさない。なぜなら、文を他の文に従属させることは、多くの場合そのまま従属形（「は」と「も」と共にあるいは無しで）あるいはそれぞれの条件形でも可能だからだ。接続詞の多くは副文の終わりに置かれる。

『口』 5-6 頁 § 26

Das Japanische hat in großer Anzahl chinesische Fremdwörter aufgenommen. 中略 Die heutzutage überwiegend übliche Aussprache der chinesischen Wörter nennt man Kan-on, die seltenere Go-on.

日本語は多数の中国語からの外来語を取り入れている。 中略 今日ほとんどの場合に一般的な漢語の読み方を漢音、それより少ない方を呉音と呼ばれる。

上記のほか、文法篇の大部分は、Seidel の著作の翻訳であるが、Seidel に見られない、独自の点もいくつかある。第一に、『日本語速習』には、ハンガリー語と日本語を対照した説明がある。それは、ハンガリー式ローマ字転写のほか、長母音の発音法（1 頁）、重複型擬態語・擬声語の説明（16 頁）、助詞の分類の試み（19-20 頁）であり、Seidel の本文とは大きな違いがある。例えば、重複型擬態語・擬声語の説明にハンガリー語との類似点が述べられる。（16 頁）

「Idetartozik még sok olyan kettőzés is, mely épen ezen kettőzött hanggal fejezi ki az állapotot, ténykedést; ilyen szóhalmozás a magyarban is megvan, mint gyakorító szó szerepel, pl. : szerte-szét (mindkét szó egyértelmű, de így együtt tágabb jelentőségű), ide s tova, innen-onnan; ehhez hasonló célzra szolgál s hasonló értelmezést fejez ki a japánban szokásos szókettőzés is.」

和訳：「この中 [筆者註：副詞の中] に状態・行動を、音を繰り返すことで表す重複形副詞も含まれる。この様な重複型の語形は、ハンガリー語にもあり、反復の意味を表す。例：szerte-szét (両方の語が同じ意味であるが、重複の形で意味合いが広がる) ide s tova、

日本語では接続詞が大きな役割を果たさない。なぜなら、文を他の文に従属させることは、多くの場合簡単に従属形（「は」と「も」）あるいは条件形で可能である。一般的に接続詞は副文の終わりに置かれる。

『日本語速習』 31 頁

A japán nyelvben az eredeti szókon kívül igen sok fölvelt kínai szó is található, a melyek természetesen a tölök különböző - japán kiejtés szerint- már módosultak s eredeti kiejtésükben változtak. Ezen használatban lévő kínai szavakat kan-on néven nevezik.

日本語には、本来の語彙の他に中国語も多数取り入れているが、中国語と日本語の発音は異なるため発音が当然日本化した。これらの中国語由来の単語は漢音と呼ばれている。

innen-onnan など。日本語の重複型副詞にもこれに類似する意味と用法がある。」

その次に、Seidel の『口』と同じ重複型擬態語・擬声語を列挙するが、その一部の意味を説明する際に、独自にハンガリー語の重複型擬態語・擬声語と対照させる。(17 頁)

例 : chinchin to (ちんちんと) : csingilingi (チンギリング)
guruguru (ぐるぐる) : körbe-körbe (クルベクルベ)

このほか、動詞の章に次ぐ「一般的な注意事項」(31 頁)があり、その中で敬意表現や人称代名詞の省略などについて説明するが、このような説明は Seidel の『口』に見られず、Akantisz の日本語観察によると考えられる。

以上の独自な点に関しては、稿を改めて考究したい。

5. 2. 会話篇

会話篇に 244 の文・表現があり、14 のテーマに分割されている。テーマは「問い」、「日本語について」、「住まい」、「食事」、「飲むこと」、「朝食」、「入浴」、「郵便局」、「時計・時刻」、「天気」、「健康状態」、「会話を始めること」、「鉄道」、「船」である。会話文はハンガリー語・ドイツ語・通常使われる転写法の日本語・発音通りにローマ字転写された日本語の順に書かれているが、『スロヴァキア語速習』も同じ形式である。

会話篇に現れる文章を Seidel の『口』の例文と比較したところ、会話篇の一部、約 33 の文章は Seidel の著作に基づいて書かれたことが明らかになった。

・ほぼそのまま引用した文章の例 :

『日本口語文典』 3 頁 : Anata wá nihon-go ó o-hanashi-nasare-mas'ká?
[あなたわ日本語をお話しなされますか。]

『日本語速習』 36 頁 : Anata wa nihongo wo o hanasi nasaremasu ka?
[あなたわ日本語をお話しなされますか。]

『日本口語文典』 156 頁 : Ky ū ji! kondategaki wo misete kure.
[給仕! 献立書を見せてくれ。]

『日本語速習』 38 頁 : Kyúji! kondategaki wo misete kure.
[給仕! 献立書を見せてくれ。]

・書き換えの例 :

『日本口語文典』 138 頁 : Koko kara Yokohama made no funachin ikura des'ka.
[ここから横浜までの船賃いくらですか。]

『日本語速習』 46 頁 : Koko kara Maruséyu made no funachin wa ikura desu ka?
[ここからマルセーユまでの船賃わいくらですか。]

『日本口語文典』 160 頁 : Tsugi no Tōkyō ye iku kisha wa nanji ni de-mas'ka.
[次ぎの東京え行く汽車わ何時に出ますか。]

『日本語速習』 46 頁 : Tsugi no kisha wa nanji ni demasu ka?

[次ぎの汽車]が何時に出来ますか。] (※ [] 内は筆者による)

『口』の序文で、Seidel は例文を多くの日本の書籍から引用したと述べるが、しかし、Seidel はどのような日本語のテキストを利用したかは、現段階では不明である。『日本語速習』の会話の、Seidel 著作との一致は 8 分の 1 程度であり、大部分は著者が自分で記載したか、他書を参照した可能性がある。

5. 3. 辞書篇

辞書篇には 1325 語が収録され、見出し語はハンガリー語である。日本語の転写は文法篇・会話篇と同じ通常の転写法である。ハンガリー式転写が括弧内で示されることもあるが、省略される事も多い。品詞は示さない。この単語集は長期間にわたって唯一の洪水単語集であった (註 18)。

著者はこの単語集を編集する際に Seidel の前述の学習書・辞書を参照したため、以下のように統一性を欠くことになった。動詞の基本形を主として連用形とし、括弧内に終止形の語尾を示す。用例を辞書篇に載っているまま示し、〈 〉に筆者によるハンガリー語の和訳を付す。

例：52 頁 *kifizetni harai* (-u) 〈支払う〉

少数ながら、連用形、もしくは終止形のみで示す例もある：

例：49 頁 *épiteni, tate* 〈建てる〉

51 頁 *képet festeni, e kaku* 〈絵を描く〉

「漢語＋する」は、文語の終止形、または連用形で示される。*nazuku*、*hoyu* のように「名付ける」「ほえる」といった下一段動詞ではなく、下二段動詞として示される動詞がある。

形容詞は「い」または「き」で終わる形で表示されているが、両方の形もある。

例：49 頁 *drága, takai* 〈値段が高い〉

49 頁 *édes, amaki* 〈甘い〉

53 頁 *olcsó, yasuki, yasui* 〈値段が安い〉

なお、誤植と見られる箇所は多いが、Akantisz の不注意により訳語を間違えた用例もある。

例：49 頁 *erős, matsuri*

ハンガリー語の *erős* は、「丈夫」、「強い」という意味であるのに、「祭」と和訳されている。Seidel の『実』の 99 頁に、*maturi: das Fest* と書いてあるが、この *Fest* の同音異義語に「丈夫」「頑丈」の意の形容詞もあり、Akantisz はそれを誤訳したと考えられる。

5. 4. 文字篇

文字篇は、日本語の音節・平仮名と片仮名の説明と漢数字一覧、片仮名、平仮名、文語文の読み物から構成される。文字篇に関しては、近藤 (2005) が「著者は日本の文字

についても書く能力があり、漢字の音訓についての知識もあったと考えられる」と述べているが、調査の際、Seidel の『日本文語文典』の日本文字を説明する部分と読み物に基づいていることが明らかになった。

類似・一致するところは次の点である。

56-60 頁 日本の文字について：『文』 § 207-211、§ 214-217、§ 219-221、§ 227-228

61-64 頁 読み物：『文』 91-94 頁、111-113 頁、115-117 頁、141-143 頁

以下に類似する説明文の例を 1 つ挙げる。

『文』 106 頁 § 209、113 頁 § 225

Die erstere Form, das Katakana genannt, findet (wie unser lateinisches Alphabet) mehr in wissenschaftlichen Werken, Wörterbüchern u. dgl. Verwendung. ……中略…… Die zweite Form der Silbenschrift ist das Hiragana, bei weitem häufiger gebräuchlich als das Katakana, aber wegen der vielen Nebenformen und der vielen Verschlingungen der einzelnen Zeichen miteinander beim Schreiben schwieriger zu lesen.

一つ目の字形は、カタカナと言い（我々のローマ字のごとく）、これは主に学問的な著作、辞書などで使われている。……中略……二つ目の字形は平仮名であり、これは片仮名より遥かに広い範囲で使われている。しかし、変体仮名と多様な繋がり方があるため、もっと読みにくい。

読み物として『戦国策』の「虎の威を借る狐」に由来する「虎と狐との話」があり、これはローマ字、片仮名、平仮名、漢字・仮名両用で記載され、ハンガリー語の傍訳と全訳が付属している（論文末の図を参照）。以下にその漢字・仮名両用の文を Seidel のものと対照させて示す。

『日本語速習』 57 頁

A japánban sokféle írásforma, vagy betűtípus létezik, melyek közül legelterjedtebb a Katakana: mely egyszerűbb írásjelekből áll és tudományos munkák, szótárak stb. írásánál használatos, míg a Hiragana sokkalta nagyobb elterjedtséggel bír, jóllehet írásjelei sok mellékalakkal bírnak s azonkívül is cifráztabbak, tehát nehezebben olvashatók.

日本語には多種の文字があり、その中で普及しているのは、カタカナである。これは簡単な字形で、学問的な著作、辞書などを書くのに使われている。これに対して、平仮名の方がもっと広い範囲で使われているが、多くの変体仮名があり、煩雑であるため、読みにくい。

『文』141-143 頁

虎と狐との話

或る時虎一疋の狐を捕へてそれを食わんとせり。其時狐わ虎に向いて我わけだもの王として天より下りし物なり。汝若し我を食わ、^ゝ忽ち罰をこゝむる可しと云へり。併虎わそれを信せざりし故に狐わ又汝若し我が言をうたがわば我が後に従うて來る可し。すべての獸皆必ず我を畏れて逃げ走らんと云へり。虎わ狐の言葉をためさんと其あとにつきて歩みしにすべての獸わ皆虎をおそれて逃げ去れり。されど虎わ己を畏れて逃げしとわ心附かず眞に狐を畏れし事と思えり。されば主人の勢またわ親の威光をたのみて威張る物を諺に虎の威を借る狐と云うなり。

『日本語速習』61-64 頁

虎と狐との話。

或る時虎一疋の狐を捕へてそれを食わんとせり其時狐わ虎に向いて我わけだもの王として天より下りし物なり汝若し我を食わ、^ゝ忽ち罰をこゝむる可しと云へり。併虎わそれを信せざりし故に狐わ又汝若し我が言をうたがわば我が後に従うて來るべし。すべての獸皆必ず我を畏れて逃げ走らんと云へり。虎わ狐の言葉をためさんと其あとにつきて歩みしにすべての獸わ皆虎をおそれて逃げ去れり。されど虎わ己を畏れて逃げしとわ心附かず眞に狐を畏れし事と思えりされば主人の勢またわ親の威光をたのみて威張る物を諺に虎の威を借る狐と云うなり。

Seidel の『日本文語文典』には6つの読み物があり、そのうち1つは新約聖書、ほかの5つは日本の書籍からの引用であるが、Seidel はどのようなテキストを参照したか、今の時点では不明である。

この6つの読み物の中から Akantisz は一体何故『虎と狐との話』を選択したのか。

『日本文語文典』では、この6つの読み物の表記は次のようである：

ローマ字：『蠶』『虎と狐との話』『燕』『燕の巢を奪いし雀の話』『犬の智恵』『東の方より來たりし博士たち』

平仮名：『蠶』『虎と狐との話』

片仮名：『蠶』『虎と狐との話』

漢字・仮字両用：『蠶』『虎と狐との話』『燕』『燕の巢を奪いし雀の話』『犬の智恵』

上記のように、四種類の表記で書かれているのは、『蠶』と『虎と狐との話』のみである。『蠶』は、生物学的な説明であるのに対し、『虎と狐との話』は物語であり、学習者にとってわかりやすかろうと、Akantisz が選択したと考えられる。

6. おわりに

上記のように、『日本語速習』の著者と出典の一部は明らかになった。

今後の課題としては、『日本語速習』の内容を調査対象とし、次の二点に関して考察を進めたい。

1. 明治期末の国語の一資料である『日本語速習』の日本語は、どのような性格をもつ

ているか。『日本語速習』に、否定形「ぬ」「ない」「なんだ」「なかった」、「くわ」「か」の用例や動詞「足る」「足りる」の両方の活用形などが見受けられる。この学習書は、当時の国語をいかに忠実に反映しているかを、同時代の国内外資料と比較して、明らかにしたい。Akantisz は、前述した通り、主として Seidel の日本語学習書を参照したため、Seidel の著作の成立についても検討する必要がある。

2. 『日本語速習』は、Seidel の著作に見られない独自の部分がある。例えば、日本語の長母音の発音法をハンガリー語と比較して「……この音は延ばすのではなくて、発音する時間単位を延ばすからである。これをよく理解してもらうために、例を挙げよう。ハンガリー語では、短母音も長母音も一つの音として発音されて、発音する時間も同じである。口・喉の開閉の位置によって調音する：gaz, gáz, mez, méz 等。日本語の発音においては、事情が異なる。[長母音は] 短母音を発音する時間が二倍になるように発音される。つまり、音ではなく、発音時間が延びるわけである。」と説明している。このような説明を加える著者の両言語に対する知識は正確であったのか。また、ハンガリー語と日本語を比較して説明する文法解説の正確さについて検討したい。

そのほか、子音の発音と転写のところに、「普段、ラ行はギリシャ文字の δ で転写される」という説明は注目されるが、この δ は、その他の日本語学習書に見られない珍しい表記法である。著者は、一体何を根拠にして δ を利用したかという点についても検討したい。

なお、著者と『日本語速習』の当時の評価に関する新しい資料の発見も期待される。

[註]

- 註1 Harangi László (1982) 「日本関係ハンガリー語文献 (1851-1980 年)」『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』376-417 頁
Sasaki Kichisaburo; ford. Speidl Zoltán (1907): Djudo, a japán dzsiu-dzsiu tökéletesített módszere. Budapest
- 註2 Harangi László (1982) 「日本関係ハンガリー語文献 (1851-1980 年)」『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』376-417 頁
国際交流基金ブダペシュト事務所作成『ハンガリーの日本語教材リスト』2009 年 10 月
- 註3 『日本語速習』を以下の学習書と比較した。
Aston, W.G. (1888): A Grammar of the Japanese Spoken Language. Fourth. ed.
Baba, Tatui (1888): An Elementary Grammar of the Japanese Language Second and enlarged edition. London, Trübner and Co.
Balet, J.C. (1908): Grammaire Japonaise Langue Parlée. Tokyo, Sansaisha
Brown, S.R. (1863): Colloquial Japanese.
Chamberlain, Basil Hall (1886): A Simplified Grammar of the Japanese Language. London, Trübner and Co. Yokohama, Kelly and Walsh
" (1898): A Handbook of Colloquial Japanese. London, Sampson Low

- Courant, Maurice (1899): Grammaire de la Langue Japonaise Parlée. Paris, Ernest Leroux
- Curtius, Donker (1857): Proeve eener japansche Spraakkurse. Leyden, A.W. Sythoff
- Florenz, Karl (1899-1902): Neue Bewegungen zur Japanischen Schriftreform. Natur-und Völkerkunde Ostasiens. 299-360 頁
- Hepburn, J. C. (1888): A Japanese-English and English-Japanese Dictionary. Z.P. Maruya
- J. J. Hoffmann (1868): A Japanese grammar. Leiden
- Noack, Philipp (1886): Lehrbuch der Japanischen Sprache. Leipzig, F.A. Brockhaus
- Rosny, de Leon (1873): Éléments de la Grammaire Japonaise (langue vulgaire). Paris, J. Maisonneuve
- Weintz, H. J. (1905): Appendix to Japanese Grammar. London, Hirschfeld Brothers
- 註 4 近藤正憲 (2005) 「20 世紀初頭ハンガリーで出版された日本語教科書とその時代背景」
『Japanese-language education around the globe ; Japanese language education around the globe』15 号 175-192 頁
- 註 5 OSZK 配置場所 : B1 621.067
- 註 6 Seidel の学習書を参照したためである。「著者が参照した文献について」を参照されたい。
- 註 7 Révay József (1929): A Magyar Könyvkiadók és Könyvkereskedők Országos Egyesületének ötven éve. 100-101 頁 (洪牙利出版社・出版物卸業者全国協会 50 周年)
- 註 8 『Magyar Nyelv』 2004 年 12 月第 4 号 512 頁
- 註 9 Gulyás Pál (1939): Magyar írók élete és munkái. Budapest 319-320 頁
- 註 10 ハンガリー国立文書館 資料番号 : MOL A 1154, 369/5 kötet 3 頁、60 頁
- 註 11 Pukánszky Kádár Jolán (1972): A Todoreszku-Horváth-gyűjtemény. Magyar Könyvszemle. 1972, 88. évf. 52-60 頁
- 註 12 Pelbárt Jenő: Papír-és vízjeltörténet. ハンガリー国立文書館のサイトに掲載。
http://www.mol.gov.hu/papir_es_vizjeltortenet/a_magyar_papir_es_vizjelkataszter_jovoje.html 2011 年 8 月 14 日閲覧
- 註 13 ハンガリー国立文書館 資料番号 : MOL A 1154, 369/5 kötet 3 頁、60 頁
- 註 14 Tóth Gergely (2010)によると、1873 年に、ウィーンに日本大使館が設置されて以来、外交官をはじめ、留学生、研究者 (松村松年、白鳥庫吉など)、新聞記者などもハンガリーを訪れた。
- 註 15 現在、入手困難の稀覯本であるが、古書店 Antikva のホームページに、この昔話集の目次・本文からの 2 ページの写真が掲載されている。2001 年に出版された、著者・編集者の情報が表示されていない『Japan mesék』(日本昔話)と比較してみたところ、一致は見られたが、綴りに異なる部分がある。Akantisz の昔話集が百年経って再版されたと思われるが、2 冊の内容を比較して確認する必要がある。
http://antikva.hu/onan/reszletek.jsp?konyv=japani_mesek&katalogusid=143902 2011 年 8 月 14 日閲覧
- 註 16 註 3 参照。
- 註 17 Brockhaus' Kleines Konversations-Lexikon, fünfte Auflage, Band 2. Leipzig 1911. 683 頁
Brockhaus Konversationslexikon, 1902-1910; Leipzig, Berlin, Wien, 14. Auflage, 17. Band: Supplement, 935-936 頁

Hoyt, L.-Oslund, K. (2006): The Study of Language and the Politics of Community in Global Context. Lexington Books, 172 頁

註 18 初めての洪日辞典は、Metzger Nándor により編纂され、原稿は 1938 年に完成し、全体で 2000 頁以上に及んだが、第二次世界大戦の勃発のため、第一巻のみ 1945 年に印刷された。

第二・第三巻は原稿のままであり、印刷されていない。

セーカーチ・エステル (1982) 「ハンガリーにおける日本学の歴史と現状」『日本と東欧諸国の文化交流に関する基礎的研究』104 頁

〔資料〕

Rozsnyai gyors nyelvmesterei. Japán. (ロジュニヤイ日本語速習) Budapest, Rozsnyai Károly

Rozsnyai gyors nyelvmesterei. Tót. (ロジュニヤイスロヴァキア語速習) Budapest, Rozsnyai Károly

Seidel, August (1890): Praktische Grammatik der Japanischen Sprache. Wien, Pest, Leipzig, Hartleben

(1901): Grammatik der Japanischen Umgangssprache. Wien, Pest, Leipzig

(1904): Grammatik der Japanischen Schriftsprache. Wien und Leipzig

(1904): Systematisches Wörterbuch der Japanischen Umgangssprache. Oldenburg und Leipzig, Schulzische Hofbuchhandlung

〔謝辞〕

『日本語速習』の写真を Tóth Gergely 氏、『日本語速習』と『スロヴァキア語速習』を Albeker Melinda 氏、ハンガリー国立文書館の資料を Pósfai István 氏の好意により入手した。

(アルベケル・アンドラーシ 本学大学院文学研究科博士後期課程)

図「虎と狐との話」

出典：『日本語速習』61-64 頁

架蔵本を利用した。

	Hir.	Kat.	At.	M.	Kh.	Hir.	Kat.	At.	M.									
わ					或る	ある	アル	A-ru	Egy-Kor									
は					時	とき	トキ	to-ki	egy									
む					虎	とら	トラ	to-ra	tyg-ris									
か					一疋	いつてい	イツテイ	i-tsu-te-i	bi-zo-pyos									
い					の	の	ノ	no										
て					狐	きつね	キツネ	ki-tsu-ne	rö-kät									
我					を	を	ヲ	(w)o										
わ					捕へて	とらまへて	トラエテ	to-ra-e-te	fo-gott									
け					を	を	ソレ	so-re	akar-ta									
だ					食わん	をくわん	クワン	(w)o ku-wa-n	azf-felt-tá									
もの					とせり	とせり	トセリ	to-ge-ri	ten-ni									
の					其	その	ソノ	so-no	Ek-Kor									
王					時	とき	トキ	to-ki										
と					狐	きつね	キツネ	ki-tsu-ne	arö-ka									
して																		
天																		
より																		
下																		
り																		
し																		
物																		
なり																		
なり																		
汝																		

